

— 特別展 —

一葉が暮らした

下谷龍泉寺町

会期

令和7年
10月25日(土)～
12月21日(日)

開館時間 9:00～16:30(入館は16:00まで)

休館日 毎週月曜日(祝休日の場合は翌平日)

※展示替えのため10月20日(月)～24日(金)、12月22日(月)～28日(日)は休館いたします
※ご来館の前にホームページ等で最新情報をご確認ください

入場料 一般 300円(200円)、小中高生 100円(50円)

※()内は20名以上の団体料金

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、
特定疾患医療受給者証をお持ちの方とその介護者の方は無料

主催 公益財団法人 台東区芸術文化財団

台東区立 一葉記念館

〒110-0012 東京都台東区竜泉3-18-4 Tel.03-3873-0004

東京メトロ日比谷線三ノ輪駅徒歩約10分

<https://www.taitocity.net/zaidan/ichiyo/>

明治26年(1893)ころの下谷龍泉寺町家並み模型



特別展

一葉が暮らしした 下谷龍泉寺町

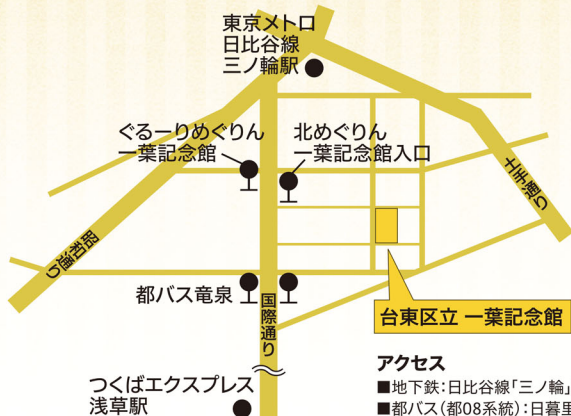
樋口一葉は、小説の原稿料で家族を養おうとしましたが叶わず、筆を折って商いを始めるため、明治26年(1893)、下谷龍泉寺町(現台東区竜泉)に移り住みます。21歳の夏のことでした。閑静な菊坂で暮らしていた一葉にとって、まるで異世界のようなこの地で、千束稻荷の祭礼や酉の市など地域の年中行事の熱気を直に感じ、また隣接する吉原にも出入りし、生活者としてこの町とここに暮らす人びとと深く関わるようになります。

荒物駄菓子屋を営みながら過ごした期間はわずか9ヶ月余りでしたが、その生活体験は代表作「たけくらべ」を生み、その後作家として開花する糧となりました。本展では、下谷龍泉寺町の地域性をあらためて紹介するとともに、一葉はここでどのように暮らし、何を見、学んだのかをひもときます。



下谷龍泉寺町樋口一葉旧居模型

三浦宏作。明治26年(1893)7月20日に入居した家は二軒長屋で隣は人力車の車宿だった。間口二間、奥行は五間半、通りに面した土間と板敷に品物を置き、荒物駄菓子屋を営んだ



台東区立 一葉記念館

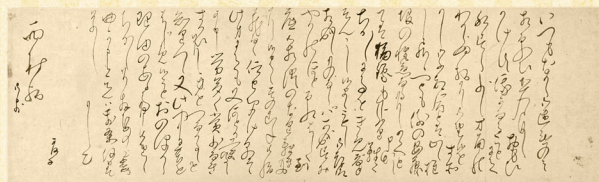
〒110-0012 東京都台東区竜泉3-18-4
Tel 03-3873-0004

*ご来館の前にホームページをご確認ください



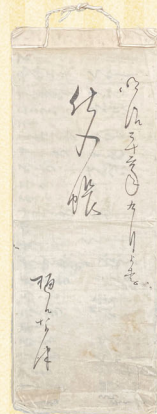
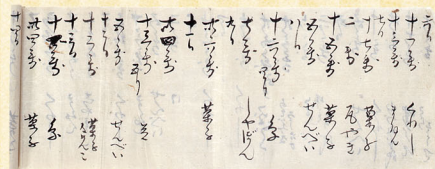
アクセス

- 地下鉄：日比谷線「三ノ輪」駅 徒歩10分
 - 都バス(都08系統)：日暮里駅(東口)⇔錦糸町駅(北口)(※いずれも「竜泉」下車) 徒歩3分
 - 北めぐりん：「一葉記念館入口」下車 徒歩2分
 - ぐるーりめぐりん：「一葉記念館」下車 徒歩5分
 - つくばエクスプレス浅草駅 徒歩15分
- *駐車場はありません。



一葉筆 西村釧之助宛書簡
明治26年(1893)7月9日

一葉が下谷龍泉寺町に転居する10日ほど前に、商いを始めるための融資について問い合わせた書簡。西村釧之助は父則義の代から親しい間柄であった



一葉筆 仕入帳

明治26年(1893)9月1日~11月23日

一葉が荒物駄菓子屋を営んでいたときに書き記したもの。表紙に「明治二十六年九月より 仕入帳 樋口なつ」とある。写真は9月6日から20日までの頁で、菓子、豆、せんべいなどが多く、他にめんこや風船、糸など玩具や生活雑貨も仕入れている



落合芳幾《新吉原角街稲本樓ヨリ仲之街仁和賀一覽之図》
明治2年(1869)

仁和賀(俄)とは、吉原で享保年間(1716~36)に始まった即興芝居。毎年8月中旬から9月中旬まで、街頭の屋台の上で期間や芸者などが演じた。「たけくらべ」に書かれた「二の替わり」とは、15日ずつ2期に分けて行われるうちの後半15日のこと



昇斎一景《東京名所四十八景 新よし原見かえり柳》
明治4年(1871)

手前に大きく描かれているのが「見返り柳」。吉原の遊客が名残惜しんでこの柳のあたりで振り返ったことから名付けられた。店が立ち並ぶ道が奥に向かって曲がっているが、この先に吉原大門がある

令和7年度 一葉祭

令和7年11月21日(金)~24日(月)
入館無料

樋口一葉の命日に開催している一葉祭。一葉を偲ぶ記念講演と朗読をお楽しみいただけます。詳しくはホームページ等をご覧ください。